

On the Thoughts and Achievements of "Ten Hermits (方外十友)"

胡, 山林
佐賀大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/9634>

出版情報 : 中国文学論集. 28, pp.19-34, 1999-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



「方外十友」について

胡 山林

唐代に於ける士人隱逸の特徴の一つは、数人が一つのグループをつくって、同じ地方で隱居し、一緒に遊んだり、詩を書いてお互いに唱和したりする点である。また、隱士グループの構成員は隱士に限らず、僧侶や道士、更には官吏までも含んだ。さて、初唐の武后時期に結成された「方外十友」という士人グループは、隱士と官吏とが結びついた、初盛唐期の最も大規模な士人グループである。つまり、それまでの隱士が、官吏を辞めたと同時に俗世から離れて山林に隠れたのと違い、唐代の隱逸士人は官を辞めても、官吏との交遊を続けたのである。小論は現存する資料により、この「方外十友」を中心として、彼らの交遊時期、場所そして特徴などについて考証したい。

一

「方外十友」という名称は『新唐書』に見えるのが始めである。すなわち、『新唐書』卷二〇陸餘慶伝に

雅善趙貞固、盧藏用、陳子昂、杜審言、宋之問、畢構、郭襲微、司馬承禎、史懷一、時号「方外十友」。餘慶才不逮子昂、而風流敏辯過之。

雅だ趙貞固、盧藏用、陳子昂、杜審言、宋之問、畢構、郭襲微、司馬承禎、史懷一と善くし、時に「方外十友」と号す。餘慶の才は子昂に逮ばざるも、而れども風流敏辯なること之に過ぐ。

と云うのがそれである。陸餘慶は武后後に蕭縣尉に任ぜられ、後に陽城尉に移り、武后が天冊万歳元年(696)嵩

「方外十友」について(胡)

山に封ずる際に、その計画及び準備に尽力したことが評価され、監察御史に抜擢された。趙貞固は名は元、字を之亮という。伝は『新唐書』卷107陳子昂伝に附載され、

少負志略、好論辯。來遊洛陽、士爭慕鄉。所以造謝皆縉紳選。武后方稱制、懼不容其高、調宜祿尉。⁽²⁾到職、非公事不言、彈琴蒔藥、如隱者之操。自傷位不配才、卒年三十九歲。

少くして志略を負ひ、論辯を好む。洛陽に來遊し、士争ひて慕郷す。造謝する所以は皆縉紳もて選ぶ。武后方に制を稱し、其の高を容れざるを懼れ、宜祿尉に調せらる。職に到り、公事に非ざれば言はず、琴を弾きて藥を蒔し、隱者の操の如くす。自ら位は才に配せざるを傷む、卒年三十九歳なり。

とある。盧藏用は『旧唐書』(卷94)、『新唐書』(卷122)に伝がある。若いころ進士の試験に落ち、兄の徵明とともに終南山、また少室山に隠棲したが、武后の長安年間(701-704)に左拾遺に抜擢された。陳子昂(661-702)は『旧唐書』卷190文苑伝に伝がある。陳子昂は武后の文明初(684)進士に及第した。ちょうど高宗が崩ずるにいたり、武后に書面を奉って高宗の墓を東都洛陽に築くべきであると弁じて、武后に高く評価され、麟臺正字を授けられた。後に右衛胄曹參軍(689年、30歳)、右拾遺(694年、34歳)などの職を歴任した。杜審言は『旧唐書』文芸伝に伝がある。彼は咸亨二年(670)に進士に及第し、初め隰城尉に任ぜられ、ついで洛陽丞に転じたが、他人の事に連座して吉州司戸參軍(698)に左遷された。宋之間は『旧唐書』文苑伝、『新唐書』卷232文苑伝に伝があり、上元二年(675)に進士に及第し、初め習芸館の職を授けられ、洛州參軍、尚方監丞左奉宸内供奉などの官職を歴任した。畢構は『旧唐書』(卷100)、『新唐書』(卷128)に伝がある。畢構は二十歳で進士に及第し、武后期に左拾遺を授けられた。太原の隱士郭襲微は、新・旧両唐書に伝がない。道士の司馬承禎は『旧唐書』隱逸伝、『新唐書』隱逸伝に伝があり、若い頃潘師正に師事し、彼の道術を受け継いだ。潘師正が死去した後天下の名山を巡り、最後に天臺山に定住した。睿宗、玄宗は司馬承禎を長安に招き、長生の術と国を治める方法を尋ねた。道士の釋懷一は史懷一という名前の誤りで、新・旧両唐書に伝はない。

以上の資料から分かるように、このグループの士人達は主に武后期に生き、洛陽および洛陽の近くに勤務する官人または嵩山に隠棲していた隱士である。具体的に分類すれば、陸餘慶、趙貞固、陳子昂、杜審言、宋之間、畢構

は官吏であり、彼らは所謂「方内」の者である。盧藏用と郭襲微は隱士、司馬承禎と史懷一は道士であり、こちらは「方外」の者である。陳子昂等は概ね則天武后期に初めて官途に就くが、仕官の道を求めていた者ばかりで、大半は庶民の地主層あるいは新興貴族出身の中下層の士人であり、その官位はともにそれほど高いものではなかった。当時同じく「方外」の遊びを楽しんだ士人グループに「方外友」というものがあつた。『旧唐書』隱逸伝田遊岩伝には次のように述べる。

永徽(650—655)時、初補太學生、後罷歸、遊於太白山。……調露(679)中、高帝幸嵩山、……授崇文館學士。……文明(684)中、進授朝散大夫、拜太子洗馬。垂拱初(685—688)、坐與裴炎交結、特放還山。

永徽時、初めて太學生に補せられ、後に罷めて歸り、太白山に遊ぶ。……調露中、高帝嵩山に幸す、……崇文館學士を授けらる。……文明中、進みて朝散大夫を授けられ、太子洗馬を拜す。垂拱初、裴炎と交結するに坐するも、特に放たれて山に還る。

また、『新唐書』隱逸伝に「唯與韓法昭、宋之問爲方外友云。唯だ韓法昭、宋之問と方外の友と爲ると云ふ」という。すなわち、韓法昭という道士は「方外友」のメンバーであり、宋之問は「方外十友」と「方外友」の二つのグループに同時に属したことが分かる。当時この二つのグループの士人達と交遊した士人は他にも多数存在した。陳子昂と田遊岩には交遊唱和詩もあり、この二つのグループの士人たちにある程度の交遊があつたと考えられよう。つまり、この時期、「方外」に遊んだ士人は非常に多かつたのであり、「方外十友」の士人達は、その代表だったのである。⁸⁾

二

次に「方外十友」の交遊時期について考証したい。「方外十友」の交遊は文明元年か二年(684, 685)頃に始まつたと考えられる。文明元年は武后政權が発足した年であるが、この年陳子昂が洛陽に入り、進士試験に及第している。また、同年潘師正が亡くなっているが、この時陳子昂が追悼文を書いていることから、陳子昂が洛陽に入つて

「方外十友」について(胡)

以降、潘師正、司馬承禎としばらく交遊があつたことが分かる。陸餘慶は武后期に蕭鼎尉に任ぜられ、ついで陽城尉に遷っており、洛陽に入った時期は陳子昂より遅かつたと思われる。趙貞固は二十七歳頃に洛陽に入つてゐるが、本伝に「武后方に制を称す」と述べていることより、その時期は陳子昂よりも遅かつたであらう。盧藏用は、彼が696年に書いた「宋主簿鳴臬夢趙六……」という詩に「坐憶平生遊、十載懷嵩丘。坐ろに憶ふ平生の遊、十載の嵩丘を懷ぶ」の句があるので、彼が696年以前に嵩山から離れてゐたことが分かり、「十載」という時間からして、それが684年か685年頃のことであつたと推測できる。このように見えてくれば、「方外十友」の交遊時期が684、685年より早く始まつたとは考えられない。

一方、「方外十友」の交遊が終つたのは、武後の延載元年(695)か天冊万歳元年(696)と考えられる。陳子昂の「昭夷子趙氏碣頌」という追悼文は趙貞固の死去を「蒼龍甲申年」と言うが、『全唐文』および他の版本はすべて「甲」の字下に「一作丙」と注釈する。甲申年は684年、丙申年は696年である。684年には、趙貞固はまだ仕官しておらず、この年死去したことは考えられない。従つて、趙貞固の死は696年ということになる。また、盧藏用も趙貞固を追悼するため「宋主簿鳴臬夢趙六……」という詩を書いてゐるが、この時彼は既に終南山に隠居してゐた。そのことは、陳子昂が天冊万歳元年(696)に建安王武攸宜に付き従つて燕北へ戦いに赴いた際に書いた「同宋參軍之間夢趙六贈盧陳二子之作」という詩に、「盧子尚高節、終南臥松雪。盧子高節を尚び、終南にて松雪に臥す」という句があることからわかる。さらに同年、司馬承禎が嵩山を離れ、天下雲遊の途についてゐる。陳子昂が司馬承禎などの道士を送るために書いた「別中岳二三真人序」に「作於龍集乙未十二月二十日」とあるのは、即ち天冊万歳元年のことである。その際、宋之問も「送司馬道士遊天臺」という詩を書いてゐる。彼はその中で「舊遊惜疏曠、微尚日磷緇。舊遊 疏曠することを惜しみ、微尚して日に磷緇す」と詠み、友人たちといよいよ別れることを嘆じた。ここから、「方外十友」の士人らがこの年に別れたことは明白である。一方、陳子昂が書いた「同宋參軍之間夢趙六贈盧陳二子之作」という詩には「宋侯逢聖君、驂馭遊青雲。宋侯は聖君に逢ひ、驂馭して青雲に遊ぶ」の句があり、盧藏用には「榮哉宋與陸、名宦美中州。榮なるかな宋と陸、名宦中州に美めらる」という句があることから、この時、宋之問が洛州參軍に進み、陸餘慶が監察御史になつたことが分かる。二人は昇

進して以降、政務や交際などが増え、交遊のための時間が少なくなつたことは容易に想像できるだろう。他方、陳子昂は自身の才能がなかなか朝廷に認められないことに不満をつのらせており、とてもものんびりと遊覧できるような状態ではなかつたようである。以上のような状況をふまえれば、「方外十友」の交遊は695、696年前後に終わりを告げたと考えられる。

ところで、「方外十友」の交遊は前後十年程続いたが、士人達の交遊は十年に限定できるものではなく、また十年間通して交遊が続いたわけでもないと考えられる。宋之問の「春夜令狐正字田子過弊廬序」と田遊岩の「弘農清岩曲有磐石可坐：」詩によれば、宋之問が洛陽に入る前、弘農県の別荘に住んでいる頃既に彼は田遊岩と交際していた。この時に田遊岩が自分を「潁陽人」と呼んでいるのは嵩山に隠棲しているからであろう。しかし、これが田遊岩が仕官する前のことか、官を辞した後のことかは確認できなかった。「方外十友」の中で、宋之問と杜審言が洛陽に入った時期は他の士人よりはるかに遅かつた。宋之問の「秋蓮賦」文の序に「天授元年（690）、勅学士楊炯與之問分直於洛城西、入閣、每鷄鳴後。天授元年、學士の楊炯と之問とに勅して洛城西に分直せしめ、閣に入るは、毎に鷄鳴くの後なり」とあることより、宋之問が初めて官職に就いたのは690年であると分かる。しかし、彼の入洛の時期は不明である。「温泉莊臥病寄楊七炯」詩に見える「温泉莊」とは彼の嵩山の別荘であるが、楊炯は長寿二年（693）に盈川令の任を授かつており、おそらく693年までには宋之問はすでに他の「方外」の士人と交遊関係にあつたのであろう。一方、杜審言は咸亨元年（670）に進士及第し、隰城尉に任ぜられる。『旧唐書』文苑伝には「累遷洛陽丞、坐事貶授吉州司戸參軍。累遷洛陽丞に遷り、事に坐して貶せられて吉州司戸參軍を授けらる」とあるが、それが、いつのことであるかは分からない。万歲通天元年（696）に營州契丹松漠の都督李尽忠が反乱を起こし、武三思が反乱鎮圧に向かつた際、著作郎崔融が付き従つた。その時陳子昂、杜審言等はすべて詩を作つて送つたが、崔融の「留別杜審言並洛中旧友」の詩には「斑鬢今爲別、紅顏昨共遊。年年春不待、處處酒相留。斑鬢今別を爲し、紅顏昨共に遊ぶ。年年春を待たず、處處酒もて相ひ留む」という句があるので、696年以前に杜審言は少なくとも696年には既に洛陽に居り、洛陽丞に任じられた可能性が高い。杜審言が「方外」の士人といつから交際していたかは更に考証が必要であるが、「方外十友」に入つた時期が宋之問よりずっと遅かつ

「方外十友」について（胡）

たことは確かであろう。

陳子昂は洛陽に十四年程滞在しているが、この間、数回にわたり洛陽を離れている。まず、垂拱二年(686、26歳)に左補闕の喬知之に付き従って金徽郡都督の僕固始を討伐し、天授二年(691、36歳)に故郷の蜀に帰って母の喪に服し翌年洛陽に戻っている。万歳通天元年には幽州へ反乱軍討伐のため幽州に行っている(翌年帰洛)。洛陽を出ていたこの期間には、他の「方外」の友と交際していないであろう。陳子昂はその後聖歷元年(698)初め頃に官を辞して故郷に帰った。宋之問も中宗が皇帝位を回復した神龍元年(705)に左遷され、嶺南へ下った。杜審言は聖歷元年(698)に左遷されている。698年以降も彼等が交際を続けていたことは、陳子昂の「喜馬參軍相遇醉歌」の序に、監察御史陸餘慶、左拾遺畢構、道人史懷一と宴会に出席したとあることから明らかであるが、彼が嵩山に遊んだことがあったか否かは不明である。

三

「方外」という言葉は『莊子』大宗師篇に次のように見える。「孔子曰：彼遊方之外者也、而丘遊方之内者也。

孔子曰く：彼は方の外に遊ぶ者なり、而も丘は方の内に遊ぶ者なり。」この「方外」とは人間に対して俗世以外の世界を指し、「方之外」の人は俗世の礼法を受け入れないと強調する。唐代までに、「方外」という言葉はほぼ三つの意味を含むようになった。其の一は「覽方外之荒忽兮、沛罔象而自浮。方外の荒忽を覽むや、罔象を沛けて自ら浮ぶ」(『楚辞』遠遊)のような人間世界に対する仙界を指す。其の二は「一従方外遊、頓覺塵心變。一たび方外の遊に従へば、頓に塵心の変を覚る」(張翞「遊棲霞寺」卷二)、以下『全唐詩』の引用は卷数のみ記す)、
「方外三賢人、惠然來相親。方外の三賢人、惠然來りて相ひ親しむ」(權德輿「臥病喜惠上人李鍊師茅処士見訪」のように仏教または仏教寺院及び道教または道觀を指す。其の三は「其母及妻子並有方外之志、與遊岩同遊山水二十餘年。其の母及び妻子並びに方外の志を有し、遊岩と共に山水に遊ぶこと二十餘年なり」(『旧唐書』隱逸伝、田遊岩伝)のように隱逸または山林田園などの隱居地を指す。そのほか、ここに挙げた三つの意味のうち、二つな

いし三つの意味を併せ持つこともある。「方外十友」の道士潘師正や司馬承禎あるいは隱士田遊岩や盧藏用などは皆道教の勝地である嵩山に交遊していた。つまり、ここでは「方外」は道教と隱居の場所という二つの意味を共に指していることになろう。

「方外十友」の士人たちは、道士、隱士また官吏とさまざまである。その彼らが何故一緒に「方外」の交遊を行ったのであろうか。以下、その原因について論じてみたい。まず、彼等の交遊の最も特徴的な点は道教或いは隱遁ではなく、「遊」を求めることにあると考えられる。特に、官吏達にとって、この点は、もっとも明らかである。「方外十友」の書いた作品の中に、「遊」の言葉はたびたび使われる。

自省遊泉石、何曾夜不歸。 自ら省ふ泉石に遊ぶを、何ぞ曾て夜まで歸らざらん。(宋之問「嵩山夜還」)

出遊杳何處、遲回伊洛間。 出て遊び杳かに何處か、遅く回る伊洛の間に。(宋之問「答田徵君」)

松間明月長如此、君再遊兮復何時。 松間の明月長く此の如し、君再び遊ぶは復た何れの時ぞ。

(宋之問「下山歌」)

願遊杳冥兮見羽人。 願わくは杳冥に遊び羽人を見ん。(宋之問「嵩山天門歌」)

何當遂遠遊、物色候逋客。 何れの時こそ當に遠遊を遂ぐべし、物色逋客を候つ。(宋之問「答田徵君」)

良遊晚兮月呈光。 良や晚に遊び月は光を呈す。(賈曾「和宋之問下山歌」)

ここに言う「遊」とは、楽しみや愉快自適という目的としての遊樂だと考えられる。すなわち、自然の美景をのんびり鑑賞し、精神的に山水に楽しむということが彼達の交遊の目的であり、そこでの単純な遊びが重要な要素となっているのである。彼らの詩歌は具体的な交遊や遊樂の場面を詳しく描いている。

坐憶平生遊、十載懷嵩丘。 題書滿古壁、采藥遍巖幽。(盧藏用「宋主簿鳴泉夢趙六」)

坐ろに憶ふ平生の遊、十載の嵩丘を懷ぶ。書を題して古壁に滿ち、藥を采って巖幽に遍し。

憶昔同携手、山棲接二賢。 笙歌如玄地、詩酒坐寥天。(宋之問「使至嵩山尋杜四不遇」)

憶ふ昔 同に手を携へ、山に棲んで二賢に接す。笙歌 玄地の如き、詩酒して寥天に坐す。

諸君推管樂。 諸君 管樂を推す。(陳子昂「同宋參軍之間夢趙六贈盧陳二子之作」)

「方外十友」について(胡)

以上のように彼等の遊びの内容はさまざまであり、酒をのんびり飲んだり、詩をお互いに唱和し合ったり、笙を吹いたり、歌を歌ったり、山のあちこちに登っていろいろな葉を採ったり、山水に楽しんだりして、大自然の美しさを満喫した。このような交遊を各人がこころゆくまで楽しんだことは彼らの詩を読めば明らかである。すなわち、このような「遊び」の好みの一致が「方外十友」の交遊の基礎となったと言えよう。また、彼等は自分達の交際をししばしば「遊」という言葉を用いて形容する。例えば、「坐憶平生遊」、「紅顏昨共遊 紅顏 昨に共に遊ぶ」、「舊遊惜疏曠 舊遊 疏曠することを惜しむ」などがそれである。このことは、遊樂こそが彼らの主な交遊の目的であったことを示すであらう。

もちろん、嵩山は唐代には道教と隱遁の爲の重要な拠点であったが、「方外十友」の嵩山を詠んだ詩歌中には、大自然の美しい風景を詠んだものが多く存在する。

茲山棲靈異、朝夜翳雲族。是日濛雨晴、返景入巖谷。霧霧澗畔草、清々山下木。此意方無窮、環顧悵林麓。

(宋之問「温泉莊臥病寄楊七炯」)

茲の山に靈異は棲む、朝夜 翳は雲族る。是の日濛雨晴れ、返景 巖谷に入る。霧霧たる澗畔の草、清清たる山下の木。此の意は方に窮する無く、環顧して林麓に悵む。

日雲暮兮下嵩山、路連綿兮樹石間。出谷口兮見明月、心裴回兮不能還。(王無競「和宋之問下山歌」)

日雲暮れて嵩山を下る、路は連綿たり樹石の間。谷口を出でて明月を見れば、心は裴回して還る能はず。

良遊晚兮月呈光、錦路逶迤兮山路長。王孫不留兮歲將晚、嵩巖仙草兮爲誰芳?(賈曾「和宋之問下山歌」)

良や晩に遊び月は光を呈す、錦路逶迤して山路長し。王孫留まらず歲將に晚れんとす、嵩巖の仙草誰が爲に芳し。

このような大自然への賛美および帰ることを忘れるほどの傾倒を詠んだ詩には妖しい神仙世界の描写はなく、人間の感情が十分に込められていると言えよう。

初盛唐時代の士人たちは、仕官して国を治める意欲が盛んで、官を辞め隱遁したいと考える士人は少なかったであらう。しかし、一方で彼らは仕官しながら、或いは都會の勤務地に近く美しい景勝地に別荘を買ったり營造した

りした。休暇の時には別荘に遊び、自然の山水模様を模倣して園林を造って、同僚や友達を招いて宴会を開いたり、山水に遊んだりした。彼らは仕官して大きな業績をあげることを求める一方で、隠士のような逍遥自適の生活にもあこがれ、仕官して自分の才能を充分に発揮しながら、隠士のような山水田園の暮らしをしたいと考えたのである。そして、彼らはそれが実際に矛盾なく両立できると思っていた。このような仕官と隠遁を統合した生活を彼等は「大隠」と呼び、最も理想的な人生として肯定したのである。ただし、「大隠」の暮らしは実は「仕隠」と言うのが妥当であろう。「仕」すなわち仕官と、「隠」すなわち隠士の暮らしの統合であるからである。斯様な風潮はおそらく武后期に起こり、士人の間でかなり流行していた。「方外十友」の官吏達が仕官すると同時に嵩山に遊び、一つのグループを作ったのも時代の風潮によるところが大きいと考えられる。宋之問はかつて「仕隠」を批判して、「宦遊非吏隱 宦遊するは吏隱に非ず」（藍田山荘）、「大隱徳所薄、歸來可退耕。大隠は徳の薄き所、歸り来りて退耕すべし」（奉使嵩山途經緱嶺）と述べたが、自身は一方で三四箇所位の別荘を持っていた。この数は當時の中下層士人としては多いと言えよう。また、「方外十友」の遊樂詩は、宋之問の作品が最も多いのである。してみれば、彼の「仕隠」批判はどこまで本根の論議であったか疑問があると言えよう。当時は、高官たちの豪華な別荘は大都會の近くにあったが、「方外十友」の官人達のような中下層の士人は豪華な別荘を都會近くに營造する力がはなかつたであろう。その結果、嵩山が彼等の良い交遊場所になったのだと推察し得るのである。

四

高宗及び武后の時代には、道教崇拜と隠士を招く気風が盛んで、高宗は孫思邈、葉法善、史德義、劉道合等道士を宮廷に招いて、丹藥を作らせ、また官職を授けるなどして、道士に対する尊敬の念を表した。同時に、高宗は隠士を探す詔勅を下して朝廷に推薦させ、科挙の試験科目の中にも隠士に関する内容を入れて、合格すれば官職を授けた。このような道士や隠士を尊ぶ風潮の中では、潘師正、司馬承禎、劉道合、王希夷などの道士や田遊岩、盧藏用などの隠士が住んでいる嵩山が注目を集めたであろうことは容易に想像できる。高宗はかつて潘師正を諫議大夫

「方外十友」について（胡）

に封じたが、潘師正はこれを拒んだ。その後、高宗は潘師正のために、嵩山に崇唐観と精思観を築いている。高宗と武后は二十年の間に前後七回にわたって嵩山に御幸して、封禪を行い、道士や隠士を頻繁に訪問している。このような背景の中で、士人達が嵩山に注目し、道士や隠士と交遊しようとするのは当然なことと言える。「方外十友」中の官吏達は、当時すべて洛陽及び洛陽に近い地方で務めており、嵩山に行きやすいという条件を備えていた。そのため、自然嵩山は「方外十友」の交遊地になったと考えられる。

しかし、嵩山が「方外十友」の交遊地になったことは、更に他の特別な意義と関係があったことに注目すべきであろう。そのもっとも重要な一つの要素は隠逸観念の変化である。司馬承禎、田遊岩などの隠士は昔の伝統的な隠逸士人と大きく異なっていた。政治腐敗や社会の混乱また戦争などが原因で隠遁した士人と違い、彼等は仕官への希望を全く持っていなかった。彼らは、例えば、司馬承禎が睿宗、玄宗の時代に、数回長安に行き、皇帝からの下問に答え、自分の政治理念を披露したように政治への関心を持っていた。しかし、それでも仕官することは全く考えていなかったのである。仕官すれば自分の身体や精神の自由を失うという現実を受け入れ難かったのであろう。司馬承禎は南朝梁の陶弘景が創立した「茅山宗」の後継者として、陶弘景のように政治に関心を持ち官僚と交際することと仕官することを区別し、官僚の交際は受け入れたが仕官は拒んだ。すなわち彼等は逍遙自適の暮らし、自由快楽の人生を希望して隠遁したのである。田遊岩は崇文館学士に任じられる前に、二十年程隠遁生活を送り、山水に遊んだ。高宗が彼に尋ねた時、彼は次のように答えた。「遊岩曰：臣泉石膏肓、煙霞痼疾、既逢聖代、幸得逍遙。遊岩曰く：臣は泉石膏肓、煙霞痼疾なり、既に聖代に逢ひ、幸に逍遙するを得たり」（『旧唐書』「隠逸伝」）司馬承禎が死去した際に、彼の弟子は追悼文に「故王屋山道士司馬子微、心依道勝、理会玄遠、遍遊名山、密契仙洞。存觀其妙、逍遙得意之場。故王屋山の道士司馬子微は、心は道勝に依す、理は玄遠に会し、遍く名山に遊び、仙洞に密契す。其の妙を存觀して、得意の場に逍遙す」（『旧唐書』「隠逸伝」）と述べている。このように、個人の快楽の為、すなわちいわゆる「逍遙自適」の精神が既に唐代の士人隠逸観念の特性だったと考えられる。

さて、五嶽の一つ嵩山は、高さ二千メートル、周囲百三十キロに及ぶ。山上には、雲が巡り、川が流れ、四季それぞれに異なる風景が見られ、山水自然の美を集める勝地である。多くの文人がこの嵩山の自然美景を詩に詠んだ。

歸去高山道、煙花覆青草。草綠山無塵、山青楊柳春。日暮松聲合、空歌思殺人。(劉希夷「帰山」、卷221)
歸去せん高山の道 煙花青草を覆ふ。草緑にして山に塵無し、山青くして楊柳春なり。日暮れて松聲合し、空しく歌へば人を思殺す。

隱暖源花迷近路、參差嶺竹掃危壇。重崖對聳霞文駁、瀑水交飛雨氣寒。(蘇味道「嵩山石淙山侍宴心制」、卷55)
隱暖 源花近路に迷ふ、參差せる嶺竹 危壇を掃ふ。重崖對聳して霞文駁し、瀑水交も飛びて雨氣寒し。

それぞれ嵩山の風景を詠じつつ、自然の美と詩人たちの愉快な気持とを主題としていることが分かる。司馬承禎、田遊岩などの隱士は嵩山を自分の隱棲地としたが、それは美しい風景をその条件としたからである。この様な隱棲地の選択からも隱逸の性質の変化を見てとることができよう。唐代の隱士の生活は、伝統的な隱逸觀念が逍遙自適の觀念へ變化したのに伴い、昔の隱士が孤独で寂しい隱遁生活を送ったのとは異なり、他の士人や在職の官人たちと交際し、快楽を追求するものとなった。このように考えれば、司馬承禎、田遊岩などの隱士が仕官しないが、官人との交遊を拒まないという態度をとったことも理解できるであろう。斯様な隱逸觀念の變化もまた、道士や隱士と官人との「方外十友」の交遊が成立した大きな要因であったと考えられる。

五

以上、「方外十友」の交遊の性質について論じた。ここで、いくつかの問題点について更に分析したいと思う。まず、「方外十友」の官人達の中には隱遁したいと考える者もいたと考えられる。例えば、陳子昂は趙貞固が隱逸を望んでいることを「諸君推管樂、之子慕巢夷。諸君 管樂を推し、之の子巢夷を慕ふ」(「同宋參軍之間」)と述べている。また、宋之間も「秉願守樊圃、歸閑欣藝牧。願を秉りて樊圃を守り、閑に歸して藝牧に欣ぶ」(「温泉莊臥病寄楊七炯」)と隱遁への思いを表している。しかし、確かに士人たちは自然の山水田園などに遊びながら周囲の雰囲気に影響された結果、無意識に隱遁しようという気持ちを抱くことがあったようであるが、このような感情は彼らの本心だったとは考えにくい。そもそも陳子昂等多くの官人たちは隱遁を希望して、「方外」で交

「方外十友」について(胡)

遊したわけではないのである。なぜなら当時、彼らは仕官したばかりであり、官吏として大きな功績をたてることへの意欲が最も強く、出世したいと思っていたはずだからである。

次に、「方外十友」と「終南捷徑」との関係に注意したい。隱士田遊岩は二十年の間隱遁した後、高宗に崇文館学士の官を授けられ、太子洗馬の高位にまで進んだ。彼は初盛唐期に隱遁したために高い官位を授けられた隱士の代表である。一方、盧藏用は嵩山と終南山に隱棲して、朝廷の招聘を待った、いわゆる「終南捷徑」の代表的な士人である。宋之問も「終南捷徑」を提唱し、「衡門棲道風 衡門に道風棲む」の末に「一祇賢良詔、遂謁承明宮。

一たび賢良の詔を祇し、遂に承明宮に謁す」となるような仕官の実現を賞賛する。終南山は長安に近く、嵩山は洛陽に近い。士人がこの二箇所で隱棲すれば、朝廷に知れやすい上に、官職を授かれば、勤務地に早く赴任できる。その為、終南山と嵩山は士人達の隱棲地として好まれたのである。しかし、「方外十友」の中で、「終南捷徑」により仕官した士人は結局盧藏用一人であった。従って、「終南捷徑」はグループの基盤ではないということになる。

最後に、「方外十友」の交遊と道教との関係に注目すべきである。彼らは「題書滿古壁、采藥遍巖幽。書を題して古壁に滿ち、藥を採って巖幽に遍し」と言うように、道士と交遊しながら、藥を採って、長生の術を尋ね、更に仙人を慕っていた。盧藏用は兄の徵明と「學鍊氣、爲辟穀。鍊氣を學び、辟穀を爲す」(『新唐書』盧藏用伝)という日々を過ごした。宋之問の嵩山で遊んだ時期の作品には、「仙人」「羽人」といった言葉がしばしば見受けられる。宋之問は「方外十友」の交遊以降も「碧潭可遺老、丹砂堪學仙。碧潭 老いを遺れるべく、丹砂 仙を學ぶに堪ふ」(「入崖口五渡寄李適」)のように道術を学び続けたのである。初盛唐時代、士人たちが道教に傾倒したのは長生の術を得、長寿を求めめるのがその主な目的であった。多くの有名な士人が特に司馬承禎を訪問して長寿の術を尋ねている。しかし彼らは、道術に興味を持ち道教の理念を受けたからといって、儒家の人生観念を変えるというのではない。彼らの人生目標は遁世のような道教思想ではなく、積極的に仕官する一方で丹を鍊り、藥を採り、長生を求め、逍遙自適の人生を享受することであった。つまり、仕官にすることと道教に興味を持つこととは矛盾しないと考えられたのである。

「方外十友」の中で、道教の影響を最も強く受けた陳子昂は、官吏としての生涯で自分の才能を發揮できず失意のままにすごし、晩年になって、「晚愛黃老之言、尤耽味易象。往々精詣、在職默默不樂、私有掛冠之意。晩に黃老の言を愛し、尤も易象に耽味す。往々にして精詣し、職に在りては默默として樂しまず、私に掛冠の意有り」(盧藏用「陳子昂別伝」と述べるに至る。しかし、次の二点に注意しなくてはならない。すなわち、第一に、陳子昂は699年に官を辞め家郷に帰り、702年に亡くなるので、晩年とは大体698年よりも後の時期を指すと考えられる点である。「陳生富清理、卓犖兼文史。思縉巫山雲、調逸岷江水。鏗鏘袁忠義、感激懷知己。負劍登薊門、孤遊入燕市。陳生清理に富み、卓犖たり文史を兼ね。思ひは縉し巫山の雲、調きは逸す岷江の水。鏗鏘して忠義を哀れみ、感激して知己を懐かしむ。劍を負ひて薊門に登り、孤り遊びて燕市に入る」(盧藏用「宋主簿鳴皋夢趙六」というように、彼は他の「方外」の友と交遊した時代には、自分の未来に対して、充分に自信を持っており、当時の政治の不備について積極的議論を展開しているほか、彼の詩文にも失望や悩みはあらわれていない。しかし、彼は仕官して以降、しばしば武后に書面を奉り、大臣達に残酷な刑罰を科すのを止めるよう勧めたが、武後に受け入れられることはなく、官位も最終的に八品の右拾遺に止まった。このような運命に対して、彼の失望感はしだいにつのり、ついに696年頃にそれが顕在化するのである。

盧子尚高節、終南臥松雪。宋侯逢聖君、驂馭遊青雲。唯我獨踳躄、語默道猶屯。(「同宋參軍之問…」)

盧子は高節を尚び、終南に松雪に臥す。宋侯は聖君に逢ひ、驂馭して青雲に遊ぶ。唯だ我のみ 獨り踳躄す、語默道猶ほ屯す。

東山宿昔意、北征非吾心。孤負平生願、感涕下沾襟。(「登薊丘樓送賈兵曹入都」、卷83)

東山に宿むは昔意にして、北征 吾が心に非ず。孤り負ふ平生の願、感涕下りて襟を沾す。

第二に、陳子昂が生涯儒家思想を持ち続けた点である。この詩は698年に書かれたが、この頃から陳子昂の思想に変化が現れ始める。彼は仕官と隱逸という二つの生き方に対して、最後まで儒家の進退觀を守り続けた。道教の俗世から離れ、仕官を徹底的に否定して、自由を得るといふ生き方の影響は受けなかったと思われる。

達兼濟天下、窮獨善其身。(「贈趙六貞固二首」其の一)

「方外十友」について(胡)

達すれば兼ねて天下を濟すひ 窮すれば獨り其の身を善くす。

夫達則以公濟天下、窮則以大道理身。嗟乎、子昂豈敢負古人哉？〔贈別冀侍御崔司議〕詩序〕

夫達すれば則ち公を以て天下を濟すひ、窮すれば則ち大道を以て身を理む。嗟乎、子昂豈に敢て古人に負かんや。このように彼の進退観は儒家思想を基盤とするもので、道教が陳子昂に与えた影響は時機という理念のみであった。彼は時機が人生にとって非常に重要であり、時機が来るかどうかが個人の運命のカギと見通していた。

夫豈不遭昌運哉？蓋時命不齊、奇偶有數、當用賢之世、賈誼竄於長沙。〔送吉州杜司戸審言序〕

夫れ豈に昌運に遭はざるや？蓋し時命齊しからず、奇偶數有り、賢を用ゐるの世に當たり、賈誼は長沙に竄せらる。

命之不来也、聖人猶無可奈何、況於賢人哉。……夫道之將行也、命也、道之將廢也、命也。子昂其如命何。

〔與韋五虛已書〕

命の来らざるや、聖人すら猶ほ奈何ともすべき無し、況んや賢人に於いてをや。…夫れ道の將に行かんとするや、命なり、道の將に廢せんとするや、命なり。子昂は其れ命を如何せん。

このような思ひは彼の詩文にしばしば表現される。陳子昂が結局四十歳にならないうちに官を辞め故郷に帰った主な原因は自分の運命に自信を失ったためであり、儒家思想を否定して道教の思想に切り換えた結果ではない。以上のような点より、陳子昂と他の方外友との交遊は道教への興味の為であるとは考えにくいと言えるだろう。

「方外十友」の交際が終わった後、隱士や道士の一生には大きな波瀾がなく、例えば、司馬承禎は武后、睿宗、玄宗の三代にわたり尊崇を受けた。しかし、官人達の方は大部分は順調な生涯を送ったとは言えないようである。すなわち、趙貞固はすぐれた才能があったにもかかわらず、武后に容れられず、結局県尉になっただけで、大きな業績を残すことなく39歳で死去した。陳子昂は二十四歳の時に科擧の試験に一回で及第したが、その後十数年の間、理想を実現できず、官を辞めてしまっている。宋之問は張易之、太平公主に事えたが、二度左遷され、さらに睿宗朝に至り嶺南へ追放され、先天年間に亡くなった。杜審言は他人が武后の親族に逆らったことに連座して、吉州に

左遷され、長安二年以前に官職を免じられて洛陽に戻り、中宗景龍二年(708)に修文館学士を授けられ、同年に亡くなった。盧藏用は太平公主に追従したため免官された。こうした官人の中で、畢構のみが順調に官位を進め、玄宗朝には、中書舎人に到った。陳子昂などの士人達はすべて高い文才を天下に知られ、武后朝において志を遂げたが、同じく武后朝に失意を味わった。彼等は才能はすぐれていたけれども官職は低く、志は大きかったが、運命は開けなかったのである。

注

- (1) 蕭県、陽城は河南道に属する。
- (2) 宜禄県は、幽州と涇州の間にある。今の河北省保定市付近。
- (3) 盧藏用の「陳子昂別伝」(『全唐文』卷238)、趙蕤の「故右拾遺陳公旌德碑」(『全唐文』卷238)参照。
- (4) 河東道西河郡にある。今の山西省汾陽県である。
- (5) 江南西道にある。今の江西省吉州市である。
- (6) 習芸館、『通鑑』(卷208) 中宗景龍元年十月「習藝館内教蘇安恒」の胡三省の注に「習藝館、本名内文学館、選官人有文学者一人爲学士、教習宮人。武后改爲習藝館、又改爲翰林内教坊、以地在禁中故也。『新書』曰：掌教習宮人書算種藝」とある。
- (7) 裴炎は伝が『旧唐書』(卷87)、『新唐書』(卷117)にある。武后の天光元年(684)に弑逆の罪で殺される。
- (8) 王無鏡、賈曾と宋之問との嵩山に遊んだ際の唱和詩により、「方外十友」と嵩山に遊んだ他の士人がまだいたことが推測できる。
- (9) (一)「方外十友」の唱和詩文：(1) 宋之問：「送趙六貞固」(2/51/619) (二)『全唐詩』第2冊51卷619頁、以下同じ)、「下山歌」(2/51/629)、「至端州驛見杜五審言沈三佺期闍五朝隱王二無鏡題壁慨然成詠」(2/51/626)、「冬宵引贈司馬承禎」(2/51/629)、「嵩山天門歌」(2/51/629)、「寄天臺司馬道士」(2/52/636)、「使往天平軍馬約與陳子昂新郷爲期」
「方外十友」について(胡)

- 及還而不相遇」(2/52/636)、「送杜審言」(2/25/638)、「嵩山夜還」(2/53/654)、「送司馬道士遊天臺」(2/53/656)、「秋蓮賦」(『全唐文』3/240/2428)。(2) 陳子昂：「薊丘覽古贈居士盧藏用七首並序」(3/83/896)、「贈趙六貞固二首」(3/83/898)、「征東至淇門答宋十一參軍之問」(3/83/896)、「同宋參軍之問夢趙六贈盧陳二子之作」(3/83/899)、「羣公集畢氏林亭」(3/84/910)、「別中岳三真人序」(『全唐文』3/214/2164)、「送吉州杜司戶審言序」(『全唐文』3/214/2164)、「昭夷子趙氏偈頌」(『全唐文』3/25/2177)。(3) 司馬承禎：「答宋之問」(24/852/896)。(4) 盧藏用：「宋主簿鳴泉夢趙六子未及報而陳子云亡今追爲此詩答兼貽平昔旧遊」(3/93/1002)、「陳子昂別伝」(『全唐文』3/238/2412)。(一)「方外十友」と「方外友」との唱和詩文：宋之問「使至嵩山尋杜四不遇慨然復傷田洗馬韓觀主因以題壁贈杜侯杜四」(2/51/625)、「答田徵君」(2/51/621)、「答田徵君」(2/53/655)、「春夜令狐正字田子過弊廬序」(『全唐文』3/241/2438)；田遊岩「弘農清岩曲有磐石可坐宋十一每拂侍待余寄詩贈之」(3/67/760)；陳子昂「酬田逸人遊岩見尋不遇題隱居里壁」(3/83/912)、「題田洗馬遊岩枯椽」(3/84/916)。(三)「方外十友」と他の士人との唱和詩作：宋之問「温泉莊臥病寄楊七炯」(2/51/621)、「王無競「和宋之問下山歌」(3/67/761)、「賈曾「和宋之問下山歌」(3/67/762)。
- (10) 陳子昂および他の士人が宋之問を「宋參軍」と称するのは696年に始まった。また、696年武后は初めて嵩山に封禪の行事を行う。陸餘慶は当年に監察御史に遷った可能性がある。
- (11) 嵩山は嘗て嵩陽県に属した。『元和郡県図志』卷五を参照。
- (12) 宋之問は弘農別荘、嵩山別荘、陸渾別荘と藍田別荘等を所有していた。
- (13) 永隆元年(680)、高宗が少室山に封禪し、逍遙谷へ行き潘師正および田遊岩の居所に御幸した。同年、田遊岩に崇文館字士を授けた。永淳元年(682)、嵩山の南面に奉天宮を築いた。永淳二年(683)、高宗が二度奉天宮に御幸した。万歳登封元年(696)、聖歴二年(698)、久視元年(700)、武后が嵩山に封禪した。
- (14) 沈佺期の「同工部李侍郎適訪司馬子微」(『全唐詩』卷95、以下同じ)、張九齡の「登南嶽事畢謁司馬道士」(卷47)、張説の「寄天臺司馬道士」(卷87)等の詩作を参照。